

序

私は1980年に医学部を卒業し、すぐに外科医として臨床に従事しました。患者さんを診て、手術を行い、合併症に悩み、再発すれば最期まで診療してきました。そうするのが当たり前で、外科医の務めと思っていました。ですから緩和医療の必要性が叫ばれるようになって、逆に違和感がありました。なぜなら、緩和ケアは特別な分野ではなく、日常診療そのものだったからです。

しかし20世紀末までの癌専門病院や大学病院の緩和医療の実情は地方の病院よりもお粗末でした。そのような経緯をふまえ、現場の医療から得た知識やノウハウを世に発信することは私に与えられた使命と考えました。21世紀になり政策的にも『がん対策基本法』が成立し、緩和医療の充実とともに緩和ケアチームの設立が誘導されるようになりました。しかし十分な質が保証されている施設は多くありません。本書は、そのレベルアップの一助になることを目的に作成しました。

本書は、にわか作りのマニュアルやハウツー本ではありません。その内容は、私だけでなく看護師や薬剤師そして栄養士などが経験したことや、問題になった事例をレッスンの形で紹介するとともに、私と縁あって一緒に歩んだ患者さんから教えられたエッセンスを示しています。ですから研修医の勉強になるだけでなく、一般医にとっても共感できる内容と思っています。また医師だけでなく、看護師や薬剤師の皆様にとっても理解でき役立つことを目的にしています。とくに緩和ケアチームの一員は、必ず知っておいていただきたい内容です。

本書は、レジデントノート誌に連載した内容を最近の医療現場に即して見直すとともに、新たに項目を追加しました。

とにかく多くの医療者に読んでいただきて、楽しく、面白く学習でき、かつすぐ役立つことを目標にしております。それだけでなく読者の皆様が、何かそれ以上のものを本書から得られたら、私の企みは成功したことになります。

2008年5月

沢村敏郎